

「2024年度バルセロナ大学スプリングスクール派遣報告書」

京都大学工学部2年 保野 萌

① 学習成果

カタルーニャ地方という複雑な歴史と問題を持つ地域について深く学ぶことによって、カタルーニャ地方の人々の考え方や問題の現状への意識を感じ取ることができた。今まで、国際理解とは、異なるバックグラウンドを持つ人と時間を共有することで相手について深く理解することだと思っており、どのように一緒に過ごすかが大事であると考えてきたが、今回、様々な事前知識を持った状態でバルセロナを訪問することができたため、より深い学びをすることができたと思う。国際理解には知識と経験の両方が不可欠だと感じた。

② 海外での経験

英語の重要性を知った。また、覚えてたスペイン語・カタルーニャ語で現地の人と会話をすると、生の言語を話したり、聞いたりすることができ、言語を学び、用いることの楽しさを実感した。スペイン語・カタルーニャ語の勉強に邁進しようと自発的に思うことができた。また、印象的だったのは、スペイン語でなくカタルーニャ語で話すと、カタルーニャ出身の方たちはとても喜んでくれた。カタルーニャ語がカタルーニャ人のアイデンティティの一つで、大変重要なものであるのだと実感した。

③ プログラム内容

現地の小学校に訪問したのがとても印象的で、このプログラムでなければ経験できなかったと思う。スペイン語を学んだ時にスペインの移民問題や、学校教育について調べていたため、特にこの授業は興味深かった。訪問先の小学校は移民の子供が多く、母国語がスペイン語やカタルーニャ語ではない子供たちがほとんどであった。そこで、子供たちが共通言語でコミュニケーションをとり、学ぶためにスペイン語・カタルーニャ語の授業が行われていた。それだけでなく、この小学校では芸術、特に音楽教育に力を入れていた。言語の壁が低い音楽教育によって移民の子供たちでも学びやすくするためである。また、芸術などは実際に体験して学ぶというのがこの小学校の基本方針であった。この制度や考え方に感銘を受けた。具体的に、音楽教育は、外部から音楽講師を呼び、子供たちに弦楽器や吹奏楽、ギターなどを教えるものであり、楽器代や外部講師代は学校が様々な基金に応募し、奨学金として得たお金で賄われている。自分が小学校でした似たような経験は課外学習として演劇やオーケストラのコンサートに行くことであった。しかし、これら学習に対し、事前学習で演目や楽器について学ぶ時間はなく、ただ見て終わることが多かった。実際に楽器を演奏したことがあるからこそわかるものや視点があるため、このバルセロナの小学校の方針はとても的を射ていると思った。また、先生たち自ら奨学金を得るというのが日本には全くない方法でとても印象的であった。

④ 進路への影響について

海外生活の大変さを身に染みて感じた。しかし、それだけでなく、海外留学ほど好奇心をくすぐられる体験もできないのではないかと考えた。新しいことを知る楽しさを強く実感した。もともと海外留学に興味はあったが、具体的なビジョンを持てずにいた。今回バルセロナと大学を訪問したことで、留学の雰囲気を感じることができ、留学をしたいと思えた。